

# 生祠とは何か

安津素彦

## はじめに

加藤玄智先生が九十三才の高齢を以って天寿を完うせられたのは、昭和四十年五月八日麗峰富士山麓の御殿場市の学労窟と名付けられた先生の隠居所であった。

先生の御遺言によって同年六月二十六日、国学院大学のこの講堂において「加藤玄智先生追悼學術講演会」を八藤玄学会▽主催で開き、梅田義彦博士、中村元東大教授、小林健三前玉川大教授と私との四人が追悼の講演を持った。以上の四名が講演いたした次第は、ひとへに先生の遺言による。以上の四名にさせるようにと、死去の前年の夏、高山乃木神社宮司に対する先生の直々の御指示による。これは高山宮司のお話による。

加藤先生の著書は和文と英文とに二つに分類され、その数は和文三十六冊、英文十三冊の多きにのぼる（『神道の研究』―方法と業績―所収、梅田義彦氏稿。本誌は雑誌『神道宗教』の特集号第四十一号である。昭和四十年十一月刊）。著述の大部分は、表題によると學術書で、中に若干の啓蒙書が含まれてゐる程度である。著書等の論旨の内容は、宗教学、神道学関係のものが多いのは当然である。中に注目すべき著として『神社対宗教』（大正十年刊。昭和五年増訂版）があり、『神社問題の再検討』（昭和十年、雄山閣）がある。戦後になり、占領軍下にあつて神社は宗教として見直され、

再出發したことは周知の通りである。さりとて神社は宗教也とみる説に対しては、学界及び神社界はかなりの共鳴をよせてはゐても、全面的に賛意を表してゐるわけではない。建て前としては神社も一つの宗教として扱はれもし、みられもするやうに變つたことは確かである。

神社についての戦前の解釈は、全く戦後のそれとは違つてゐた。「神社は國家の宗祀」とみて宗教と扱はないとする非宗教説が大方の趨勢であつたと云つて宜しい。宗教説に組み立てゐる人の立論にしても、非宗教説に加担した人の主張をみても全く同じ論、同じ説を支持してゐる人々の間ですら、一致した共通点を論拠としての發言とは云へない。第一に宗教といふ語義を検討しても、宗教の意味について専門家は五、六十にも余る定義があると申してゐるのであるから、論者が甲論乙駁を繰返してみても、それぞれの人々が一致のない宗教説に立つて主張してゐる限り、相互の論議は充分噛み合はないのは當然のことであらう。遙か遠方に離れ離れのままに、兩人が向き会ひ劍を振りかぶり又打ち降してみても、距離に距りのある以上、相方共相手の手許に飛び込んで打合ひにならぬので、何れの人もかすり傷一つも負はずに健在のままである。論議する場が別々であるから、勝負が付かぬのと同様である。

『神社対宗教』はそのやうな百家争鳴の論争の内容を知り、延いては當時の神道界の動きを把へる為の歴史的産物として興味深いものである。

本席において紹介したいことは、表題に掲げた生祠についてである。私に課せられたことは加藤先生の『本邦生祠の研究』につき講演するやうにとの内示であつた。生祠研究といつても、単に書名をみたり、聞いただけでは、生祠の正しい理解や意味がとつきにききとり難いであらうし、又、生祠の研究が神道史又宗教史上にどのやうな意義があり、位置付がなされてゐるのかとの点も亦、明瞭ではなからうから、これらを考慮して話をするやうにとの注文が付けられてゐる。尤も千万のことである。仍つて以上の諸点に注意を払ひつつ講演する心組みである。

## 生祠とは何か

先づ生祠についての説明をする。『本邦生祠の研究』の自序で、生祠について先生は次のやうに説明してをられる。

生きてをる中から、人間を神に祭った神社、換言すれば、肉体の生活事実が、尚存続して居る中から、その人間の中に、人間以上の神の光をみて、その生靈イキタマ又はその靈肉両者から成つてをる人間を、人間以上の神として拝祭する為に出来た祠宇は、之れを生祠と呼び、かう云ふ意味で、這種の人間を、まだ生きてをる中から神として拝祭する——縦令特定の祠宇はまだ設けられなくても——のを生祀と名づける。

「生祠」とは生と祠ホコとの二語の成語である。「死祠」の対語とみられる。人間を祀った社は多い。靖国神社を始め乃木神社、東郷神社等の国家或は社会のために生命を捧げた人或は国家へ忠誠を捧げた英れた人を祀った神社は何れも、既に亡くなった人を祀る社であるから死祠の分類に入る。死後に社を創建したからである。

生祠は死者を祀った社ではない。生きてゐる人を祀った社を指す。生きてゐる人、現に肉体をもつてその日その日の生活を営んでゐる特定の人物に神聖性を感じとつて、その上で宗教的な建物を設けて祀ったとき、その祀宇を生祠と称するのである。生きてゐる人物に神聖感、カシコシとの心情を懐いたとしても、さう感じた人（又は人々）は必ずしも一定の社の如き堂の如き建造物を設けて祀るとは限つてゐない。遥拝の形式をとつたり又は写真等の影像をしつらへたり、或はその特定者の所有したもの——衣類・品物等、或は菅原道真の配処にあつて天皇より下賜せられた御衣を拝した例などは、このケースにはあてはまらないが、生祀を理解する媒介の役目を果すものではあるまいか——を通して何らかの宗教儀礼を執り行ふときには、これを生祀と名付け生祠と区別をする。

生祠も生祀も音は共通であるが、以上のやうな区別がある。大事な点である。

## 研究の端緒

先生の生祠の研究は、大正中中期に始まる。往古から、我国では、天皇は現津神、現人神等と申し、生きたまま神と仰ぐ信仰があった。英雄、偉人も然り。神とは人也（白石）とも云ふ。

曇竜は真宗の僧であり、神仏一致の立場をとった学者僧でもある。彼は、天照大御神は御出生以来、今も猶、生きつづけてをられるからして、その大御神を祀る神宮は生祠である、と主張してゐる。曇竜は勸学といふ真宗最高の学問僧である。

天照大神の如きは生神なり、一現の後、その崩を聞かざるの故に……（『垂鈎卵』初篇・四、〈真宗全書〉一七八）  
伊勢は生祠なり、太神は生て天に懸れるの神なるが故に……（『同書』初篇二一〈真宗全書〉八二）

註 曇竜（一七六九年明和六年——一八四一年天保十二・八・十一 七十三才寂）安芸国の生。源頼政の子孫と云ふ。広島正善坊正楷の弟子となり、内外の典籍を学ぶ。上洛の後、本派本願寺学林に又遍歴し、修学。名声夙に高い。寛政・享和年中、三業惑乱の件起るや師大藏を助け正義を主張す。文化年中矢野大倉なる者、芸備にあり、富永仲基・平田篤胤の流れを汲み論陣をはるや（一八一一年、文化八年）、垂鈎卵を著し論斥に努めた。

## 本書の概要

先生は、皇孫の天降りにあたって大神が下された神鏡奉斎の勅語について、皇孫以後崇神天皇に至るまで、この御鏡は天上の大御神の象徴として祭祀を行ひ、崇神天皇の御代大和笠縫邑に奉遷り直しては伊勢に奉斎した点、又宮中賢所の淵源をなしてゐる点に心をいたすと、多少考察の方式を変へれば曇竜と同様の結論にいたる。即ち伊勢の神宮と

賢所とに生祠の起源を考定することが出来る、と先生は述べられて、曇竜の神宮生祠の論旨を大筋においては認めてをられる。

以上の点が一つのきっかけになり、又所謂死後の偉人、国士を祀る神社の多く建てられてゐる事實に着目されて、生きてをる人物を祀る神社が、日本中の何処かにあつても筋として宜い筈、否ある筈である、との目安を立て、大正十二年に財団法人明治聖徳記念学会の紀要を通じ、先づ生祠の有無等についての質問状を広く発し、昭和六年には台湾（今日の中華民国）で調査を試みる。そのうちに資料も追々集まつて来る。資料によつて実地踏査に加へて、根本史料の検討の上、生祠であることが判明するままに発表を重ねてきた。又史実の研究も一段落が付いたので、一応纏めたものが本書である。本書の結論にはこの点が明かにされ、第二章以下は史料の報告を中心に報告と説明とが試みられてゐる。

先づ第一項に「雲上御生祠」と題して、明治天皇或は天皇と昭憲皇太后様合祀の生祠例の六例に加へて、今上陛下の生祠一例の計七例を例示し、その一つ一つの生祠について具体的に仔細な解説、説明を施してゐる。

計七例のそれぞれの生祠につき、ここで紹介の勞をとることは時間の点で許されない。興味を懷かれた人は直接、著書に触れて味はつて頂くこととして、一例だけ叙べておく。

明治と御代が改まつて、九年（一八七六年）に、陛下の東京の御巡幸が行はれ、同年の六月二十七日・八日の両日は松島の御巡覧の日であつた。その折、御乗船を献上した人は、石巻港の住人小西九兵衛といふ人物である。御使用後その御用船は、献上者小西九兵衛に下賜せられた。本人感激措くあたはず、御用船を解体し保存すると共に、その用材の一部で御乗船の模型（三尺八寸二分）を造つて、床間に奉安する。同時に自宅の庭に社を建てて天皇をお祀りした。明治天皇の崩御の後、高辻修長子爵の筆になる「明治神社」の扁額を掲げて、毎年御回遊の六月二十七日・二十八の両日をお祀りの日と定めて、祭祀をつづけてゐたと云ふ。先生の調査は昭和二年であつたから、当時で既に五十数年

祭祀はつづいてゐたことになる。

猶、御用船の模型は、大正二年（一九一三年）まで保存してきたが、腐蝕することを恐れて、当主は齋戒し浄火を以つて焼き、灰は集めて土中に埋蔵し、その上に塚を築いて御船塚として残つてゐるとの事である。以上は昭和初期頃の实情であつて、今次の大戦を経てどう変化をしてゐるのかについての明細な点は調査未了で不明である。

以上第一項は、天皇・皇后並びに今上陛下の生祠について述べたものである。第二項は「生祠せる年時を指し得るもの」として、山崎闇斎の垂加霊社と会津藩主で垂加神道家の保科正之の神祠土津霊社以下の四十例を示す。第三項は「生祠せる年時の明確には指し難きもの」で、松木春彦神主の生祠以下二十六例を示してゐる。

以上で第二章第二節の「生祠の種々相」の項は終る。

次いで、第三節として「本邦生祠の建立と生神奉祀の年代一覧」を掲げてゐる。(一)創建年代の判明してゐるものと大体判明可能なものとして六十八例、(二)創建年代の考定し易からぬもの、として二十一例を示す。次に成立の時代順に生祠と生神奉祀の分布状況を列挙する。併せて生祠の分布を日本の地図の上に示す。

第三章は「生祠成立に関する宗教学的考察」で、生祠の宗教学上の意味・位置付け等を論じてゐる。

偉人傑士等を、その生前において既に社祠を創建し祭祀する生祠は、人間崇拜 (Anthropolatry) の一つの例である。

人間崇拜は、内容上で分類し、次の三種に分けてみると意味も明かになる。

- 1 死霊崇拜 Necrolatry or worship of the dead
- 2 祖霊崇拜 Ancestor worship
- 3 祖師崇拜 Hagiolatry

人間崇拜は、自然教期においても、文明教期即倫理的宗敎時代にも何れの時代でも存在する。この例は、アール

ヤ民族の信奉する宗教に見本がみられる。かやうな宗教意識を發現する宗教を、神人同格教、神人渾一教又人本教と云ふ。この宗教に対立する宗教をば、神人懸隔教ヘンカクキョウ又は神本教とも称する。セム民族の宗教は、將にこれであつて、ユダヤ教、回教等はその代表例である。

仏教は、神人同格教の尖端を行くものである。釈迦は人間であり乍ら、神々の中の神、一番優れた神、天中天と稱したり、人のみならず神にとつても師匠である人天師 (Sastadevamanusanam) 更に超人 (Utama-purisa) ともいはれてゐる。禅宗では即心是佛、是心即佛を説くし、真言宗は即身成佛を主張してゐる。以上の説明は、何れも仏教は神人同格教を核心としての教へであることを認めての説明である。

神人同格教的宗教意識は、アーリヤ民族、印欧民族には初期から一貫してゐる意識といへる。仍つて歴史的にみてギリシヤのアレキサンダー大王、リサンドロス、デメトリオス、ポリオルケテス等の英雄傑士は西紀前において既に生き神であつたことを示すものである。ギリシヤにつぐローマでの皇帝崇拜の実情についてはG・ムーアの宗教史を引用して証明してをられる。

エジプトの古代にあつては、代々の王は神、とみられてゐた点は申すまでもない。

隣りのシナに生祠の立てられた事は固よりである。清時代、乾隆帝の頃の大儒趙翼(一七二七—一八一四)は『陔餘叢考』四十三巻を撰した。一種の百科事典であり、歴史の研究には極めて有用な参考書である。三十二巻には凶礼の事項を収め、中に八生祠の条がある(因みに同三十二巻中には八神道の一項あつて、謂墓路称神道の一文がみゆ)。全文四七〇字余の小文であるが、良吏の死後、郷民の追慕敬徳のあまり祠堂の建立された幾つかの例を挙げると同時に、生前において立てられた祠堂の例を示してゐる。本書によるとシナの生祠の起りは燕の宰相の欒布のために衆人の建てた欒公社である。尚、石慶・任延・韋義・光武・呂謹・張全義・韓魏等の善政による庶民からの立祠の例を示し、「此皆生而立祠者也」と結んでゐる。

井上哲次郎博士は雑誌「東亜の光」二十三卷五号で、『陔餘叢考』を根拠にシナの生祠を論じてゐる、との事である。この稿で井上博士は、近松戯曲中に生祠思想が存することを指摘してをられる由である。「松風村雨束帯鑑」(元祿七年—一六九四年、近松四十二才の時上場)がそれである。その一節に次の文言がみえる。

さて浦島の翁が昔、日本紀を引せられ「更に疑ふ可からず、生ながら神に祝ふ可し」と網の明神と神号を賜はり、丹後風土記に載せられ

浦島太郎、足軽々と馳来り、敵を擲んで差上げ、我れ仙宮に入り、生ながら神となり、国土を守り、悪魔を払ふ神力の、神変自在を見よや。

扱て、我国、シナ何れの国にも生祠は立てられたものの、彼我にその立祠理由の点に相違のあるやを先生は疑念せられてをる点は注目に価する。良吏の人格に神光の閃を拝し生祠を立てたこともあらうが、他の立祠の要因として人民の側での政策的な意味から——諂諛から、苛斂誅求の暴政の予防上から生存中に神に祀り上げた例が尠くないらしいと指摘して、その理由、根拠に白楽天の「立碑」なる碑文を挙げてゐる。

第四章「本邦生祠構成の宗教心理と墳墓及び記念碑」。神宮祠官松木春彦、垂加神道の山崎蘭齋らが自ら生祠を立てたり、白河楽翁松平定信の白河の生祠、桑名の守国神社の創建の如きは、固より神人同格教的宗教意識に基づく。仏教の見性成佛、即身成佛、父母所生即証大覺位の教と同一精神である。

黒住教祖宗忠は次の三十一字でこの心意を示してゐる。

神といひ佛と云ふも天地の誠の中に住める生き物

紫笛道人の詠んだ歌には、人間の中に神をみてゐる。

世の為に身を惜まぬは佛なり楽をしたがる奴は是れ鬼

佛の代りに神の語を置くと、神人同格教の神道神観となる。以下の歌は代表作である。



人の心の清明なるは則ち神也（原漢文。忌部正通『神代口訣』）

朝な夕な国民思ふ真心のたゆみなきこそ神と云ふべし（赤木忠春）

天地の中にみちたる草木迄神の姿と見つつ恐れよ（『兼邦百首歌抄』）

神まさぬ方はあらじな荒汐の汐の八百重も荒山中も（千家尊澄）

以上は何れも、神人同格、人間の中に神を見る心意と、自然の中に神をみる真理とを道破したもので、宗教学の祖のオランダの学者ティール教授の God in man と God in nature の心意である。仏教哲理を借りて表現すると、

草木国土 悉皆成佛

一色一香 無非中道

である。

猶、本章では、生祠と記念碑・銅像・寿像・墳墓等との差を懇切に説く。生祠は「人間を通してではあるとしても、人間以上の神の存在を予想してをる」。記念碑等にはかかる感情はない。両者は質的に差はみられるが、後者を媒介として、前者へ昇華する可能性のある例として、一つの実例を挙げて説いてゐる。

教職にあること約四十年「村の生神様」と、崇められる府下西多摩郡秋留村下田宏氏（六八）の頌徳碑が同村小学校内に出来たので、十九日午前十一時除幕式が行はれた。参列者千余名。下田氏の愛孫きみ子さん（四つ）により拍手裡に幕は落された。司会者の告辞や来賓の祝辞、下田氏の挨拶などがあって式は閉じられた。下田氏は明治十三年（一八八〇）東秋留村の訓導に任ぜられて最近退職するまで、専心子弟の教育に力を注ぎ、熱心な教育ぶりと高潔な人格は敬慕の的となり、一ヶ村のうち、氏の薫陶を受けぬものは僅か七人といふ少数で、除幕式にも「この不景気に困ったことをしてくれた。わしは、さういふ席へ出るのはいやだ」と拒んだのを、無理に家族が連れ出したもの、なほ同村は府下でも財政難のひどい方で、小学校教員の住宅料を削ったり、小使を廃止したり

して、問題となつてゐたが、下田氏の建碑計画には一人の反対者もなく、「先生のためなら食ふものを食はなくて」と寄附が集まり、文字通りの淨財一千元で出来上つた美しくも尊いものである（東京日日新聞。昭和五年十月廿日）。

下田宏と呼ばれる小学校の老教師への頌徳碑建設にまつはる村民の心情真実の報告である。この報道につき、これは道徳上の意義ある頌徳碑であるものの、「遂には神人同格教的宗教意識の活躍発現上、完全なる生祠にも成り得る可能性が十分であると思ふ」と結んでをられる。

## 第五章 結論——本邦生祠研究の理論的及び實際的意義

この表題について先生は次のやうに纏めて述べられてゐる。「日本に於ては、人間即ち神佛てふ神人同格教的信念の下に、古今その修養に努め、人格の向上を計り、人も聽ては、神格即ち神の位置に達し得ると云ふ事を理想として、古人は精進努力四六時中奮つて修養を怠らなかつたのである。是れ独り日本人の修養工夫であつたのみならず、印度の古聖も之れを教へ、支那の賢哲も之れを説いたのである」。

かくて次の幾例かを示して本書を閉じてゐる。

戒為甘露道 放逸為死徑

自強守正行 健者得度世（法句經放逸品）

良心名如来（中本起經）

情塵已遣 人乘即是真諦（沙石集四卷）

自性迷即是衆生 自性覺即是佛（六祖壇經）

忘念は凡也 道念は佛也 此故に妄念を離るれば如々の佛也と云へり 佛性本来是有 只へだつる所妄念也

(沙石集卷七)

個々人心有仲尼 (石田梅岩)

諸欲皆除去 常人即聖人 (梁川星巖)

人欲淨尽 明德日新 天理流行 乃至聖人 (朱子の家言)

## むすび

柳田国男先生は『人神考序説』——人を神に祀る風習——の一文の序に、先づ次のやうに叙べられる。

この論文を書いたのは大正の末年で……(この論文は)俗な言葉で言へば、これは日本の神道を新に研究しようと思う者にとって一つの稽古台である

本文の冒頭の一句は、神道の一つの特質と神道研究のポイントとを指摘する。

曾て我々の間に住み、我々と共に喜怒哀楽した人たちを、其死後一定の期間を過ぎ、若くは一定の条件の下に、大よそ従来方式に従うて一社の神に斎ひ、祭り拌み且つ禱るといふことが、近い頃までの日本民族の常の習はしであったことは、之を認めない者は無いであらう。如何なる事情又は考へ方が、特に我々の国ばかり、斯ういふ信仰を發達せしめたものであるか。それは早晚必ず説明せられねばならぬ大切な問題である。

柳田先生の念願せられた末尾の点は、加藤先生の著者が、その責の一斑を果したと云へる。しかし猶一段の精密な研究、周到な調査は、研究者にとっての課題として残されてゐる。

先生中心の集ひ藤玄学会が脱皮し「生祠研究会」が発足したのも、先生の学績の繼承發展にその目標のあつたもの、中心の狙ひは生祠の調査、生祠の意味及意義を通しての神道の鮮明・検討にあつた。努力の不足なり、これだけ

蒐集せられた類例に更に新たな資料の探索には日時と努力とが嵩まざるを得ない実情もあるので、成果は幸ったとは仮初めにも自負出来ぬ現況であって、先生にも面目ない次第と慙愧に堪へない。

終りに當って二三の触目した文献上の例を示し、今日猶も脈々生きつづけてゐる生祠信仰、神道信仰を述べて責任を果したい。

昭和二十四年といふ年は、明闇の両極端のきはだった年であつた。未だ虚脱状態の真只中に転落したままの占領時代のこの二十四年にはアメリカ経済人シャウプが来日して税制改革を命じ、所謂竹馬経済を切りすて、日本は独りで自分の両足で大地にしっかりと立って自立すべき敢行を強いた。国際法、国際正義に戻つた共產主義国家ソ連の不当な抑留にあつて生死の堺をさまよひ、やっと帰国を許された満洲の邦人の一部が、引揚げ船の高砂丸で舞鶴港に入港したことは朗報であつたものの、引揚者は待ちわびてゐた出迎への肉親の涙にくれる姿を尻目に、東京代々木へ直行し共產党へ集団入党したことは、ソ連の洗脳の激烈さ、報道の自由、聞いたり見たりする自由も全くなく、唯一方的にソ連に都合のよい報道のみ知らされ、それを鵜呑みにして暮してきた人人の行動とはかくの如き始末か……と驚き、恐れ、呆れはて、共產主義国家（社会主義国）の実体をまざまざと知らされたのも、この年であつた。

暗愴たる事件に更に、不幸が続いた。平事件（六月三十日）、下山事件（七月五日）、三鷹国電暴走事件（七月十五日）、松川事件（八月十七日）と果てしなく不吉なミステリーまがひの迷宮入り事件が跡をたたない。

こんな年の暮、十二月十日湯川秀樹博士が、日本人として最初のノーベル賞受賞者としての報が全国一斉に知らされた。またとない朗報に全国民は湧き上つた折しも、一大阪在住の人によって「湯川神社」設立が提唱された。この提案は冷笑の裡に抹殺され葬られた。詳しい当時の資料を求めたが徒勞に終る。しかしこの提案が事実であつたことは、次の新聞報道が証してくれる。

湯川まんじゆう、湯川神社のハナシは感心しませんか？そりや、しかし冗談としちゃ面白いですね、それ以上重

く考えません。(昭和25・8・17、東京朝日)。

湯川博士について、東京教育大学の朝永博士が再びノーベル賞を受賞したのは昭和四十年十月であった。朝永教授に対しての祝ひがいろいろの形式で示される。関聯する二三の話題を東京朝日の「今日の問題」欄で取上げた中で、こんな記事がある。

京大にお粗末な湯川記念館ができ、それが基礎物理学研究所に発展したくらいのものだ。当時、口さがない悪童たちは「ヌカワ神社」をつくるがいちばん安上りだろう」といったものだ。(朝永博士の受賞に当って)政府も単なる「トモナガ神社」の建設でお茶をにごさぬように願いたい。

因みにこの一文の主題は「トモナガ神社」とある。湯川神社、朝永神社については多分に茶化した書き方をしている気味がある。又その意味も「お祭り騒ぎ」「馬鹿騒ぎ」とも受けとれる。

「お祭り」を「お祭り騒ぎ」としか了解できない新聞記者のセンスでは日本人ジャーナリストとして先づ落第だ。だが以上の資料から生き生きとしてゐる日本人の心情は今に一部では健在してゐることが証される。

あらゆる点で英れた人物を、謙虚に称へ敬ひ畏み仕奉る心情は、寔に素直であり純粹であつて好ましい宝物ではあるまいか。大事に今後共に育てていきたいものだ。

司馬遼太郎氏とドナルド・キーン氏との対談『日本人と日本文化』(中公新書)には、幕末に来日したオランダ医師ポンペ氏の生祠を建てた一青年医師の話がみえる。

シーボルト(一七九六～一八六六年)はドイツ人医師で博物学者でもある。文政六年(一八一三年)オランダ商館付医師として来日、長崎郊外で塾をひらき、高野長英らが学んだりして洋学の研究の基礎を固め、我国の学術の発展に寄与するところ大であつたことは申すまでもない。

シーボルトの帰国後、安政四年(一八五七年)ポンペという医師が幕府から正式の招待をうけて来る。このポンペ

に教へをうけたのが松本良順で、將軍の奥医師、函館の五稜郭の戦の後には新政府に改めて奉仕し、後には医軍總監になった。

ボンペの間接の弟子の一人に荒瀬といふ青年がゐた（間接の弟子といふ理由は、どうしたわけか幕府は、松本以外には他の人のボンペの弟子になることを許さない。止むを得ず、ボンペの講義のノートを良順は宿に持ちかへり、そのノートをそのまま写す者が、間接の弟子となる）。

荒瀬は周防の三田尻の町医の息子であった。「他の青年と同じようにボンペを神さまのように思ったらしい」。後に医師となつてから、「自分が今日あるはボンペ先生のおかげである」として、三田尻の屋敷に社をたて、ボンペ神社と名付け、家族一同朝おきると必ず拝んだ、といふ。

生祠建設の精神的前提は、生き神信仰である。生き佛信仰でもある。最近小冊子であるが目にとまったものに『生き神信仰』——人を神に祀る習俗——（瑞新書。宮田登著）があるので紹介して本日の講演を終ることにする。——終——

（国学院大学教授）